高村光太郎の幸福

古川哲史

昭和四十年前後の五、六年間にわたしのもっとも愛読したのは、斎藤茂吉の著作のほかに、詩人・高村光太郎の作品があった。光太郎の作品は、筑摩書房版の十六巻の全集におさめられていて、五十六巻におよぶ膨大な茂吉の全集には、量的にはずっと劣っているが、質的には両者のあいだにたいした差異はないであろう。ことに茂吉が「全力的」をモットーとした作家であったのに対して、光太郎が「純粋」を第一義にして生きたところに、わたしは不尽の興趣をおぼえるのである。

宿命的な彫刻家

さて、今、わたくしは「詩人・高村光太郎」と言ったが、高村光太郎自身は「私は何を措いても彫刻家である。彫刻は私の血の中にある。私の彫刻がたとひ善くても悪くても、私の宿命的な彫刻家である事に変りがない」（『自分と

詩との関係』、全集第八巻）としていた。「自分にとって何よりも確かなことは、私が内面から彫刻家的素質に貫かれているということである。いわば世界を見る目が彫刻家的になってしまっているということである」という『自伝』（全集第八巻）のことばも、彫刻家としての宿命と自負を表白しているようであるが、「彫刻は私の血の中にある」とか、「私は内面から彫刻家的素質に貫かれている」とは、どういうことなのであろうか。

高村光太郎の父・光雲は、明治二十二年以来、東京美術学校彫刻科に勤続すること三十五年以上におよんだ彫刻家であった。この光雲について光太郎は、「静かに考へてみると、結局父光雲は一個の、徳川末期明治初期にかけての典型的な職人であつた。いはゆる『木彫師』であつた。もつと狭くいへば『仏師屋』であつた。仕事の種類からいつて、仏師屋の縄張をはるかに突破したやうな、例へば『楠公銅像』とか、『西郷隆盛銅像』とかいふものを作つても、その製作の基調はやはり仏師屋的であつた。又その気質なり人柄なりに於いても完全に職人の美質と弱点とを備へてゐた。その職人的人生観は晩年に至るまで変らなかつた。仕事のことにかけてはどんな権力にも人情にも負けない職人気質の一徹さがあると同時に、世間的の栄誉にかけてはひどく敏感であり、自己の帝室技芸員従三位勲二等といふやうな肩書を大層大事にして、彫刻の箱書に一々それを書くといふ町人根性を持つてゐた」（『父との関係』、全集第十巻）というふうな紹介をしているが、その「町人根性」は光太郎にとり、堪えがたく鼻もちならぬものに映った。『父との関係』の右の部分は昭和二十九年一月に書かれているが、それより二十四年も前の昭和五年九月に、すでにそのやりきれぬ感情をぶちまけた『のつぽの奴は黙つてゐる』という詩を光太郎は発表している――。

『舞台が遠くてきこえませんな。あの親爺、今日が一生のクライマックスといふ奴ですな。正三位でしたかな、帝室技芸員で、

名誉教授で、金は割方持つてない相ですが、何しろ仏師屋の職人にしちやあ出世したもんですな。今夜にしたつて、これでお歴歴が五六百は来てるでせうな。喜寿の祝なんて冥加な奴ですよ。運がいいんですな、あの頃のあいつの同僚はみんな死んぢまつたぢやありませんか。親爺のうしろに並んでゐるのは何ですかな。へえ、あれが息子達ですか、四十面を下げてるぢやありませんか、何をしてるんでせう。へえ、やつぱり彫刻。ちつとも聞きませんな。なる程、いろんな事をやるのがいけませんな。万能足りて一心足らずてえ奴ですな。名人二代無し、とはよく言つたもんですな。やれやれ式は済みましたか。ははあ、今度の余興は、結城孫三郎の人形に、姐さん連の踊ですか。少し前へ出ませうよ。』

『皆さん、食堂をひらきます。』

満堂の禿あたまと銀器とオールバックとギヤマンと丸髷と香水と七三と薔薇の花と。

午後九時のニッポン　ロココ格天井（がうてんじやう）の食慾。

ステュワードの一本の指、サーヴィスの爆音。

もうもうたるアルコホルの霧。

途方もなく長いスピーチ、スピーチ、スピーチ、スピーチ。

老いたる涙。

万歳。

麻痺に瀕した儀礼の崩壊、隊伍の崩壊、好意の崩壊、世話人同士の我慢の崩壊。

何がをかしい、尻尾がをかしい。何がのこる、怒がのこる。

腹をきめて時代の曝しものになつたのつぽの奴は黙つてゐる。

往来に立つて夜更けの大熊星を見てゐる。
別の事を考へてゐる。

右の詩にぶちまけられているのは、「正三位、帝室技芸員、名誉教授」である父・光雲の世俗的栄誉にたいする反撥と、それを取りまく虚飾にみちた雰囲気にたいするやりきれない感情であるが、「へえ、あれが息子達ですか」以下の数行には、仏師屋の血をうけた宿命にたいする自嘲と、それでもただの仏師屋とは違うのだという自負とが、こんがらがって表明せられているようである。

では、ただの仏師屋とどういうふうに違うのか。さきに引用した『父との関係』という文章によると、光太郎の「父はよい職人の持つてゐる潔癖性と、律儀さと、物堅さと、仕事への情熱とを持つてゐたが、又一方では職人にあり勝ちな、太つ腹な親分肌もあり、多くの弟子に取りまかれてゐるのが好きであり、おだてに乗つて無理をしたり、いはば派手で陽気で、その思考の深度は世間表面の皮膜より奥には届かなかつた。そして考へるといふやうなことが嫌ひであつた。この世は人生であるよりも娑婆であつた。学問とか芸術とかいふものよりも、芸人の芸や役者の芸の方が身近だつた。梅原の舞台からきこえてくる鼓の音にききほれ、団菊左に傾倒し、円朝に感服し、後年には中村吉右衛門をひいきにし、加藤清正のひげのモデルになつて喜んだり、奈良の彫刻では興福寺の定慶作といふ仁王をひどく買つてゐて、推古仏は理解しなかつた。外国のものでは大陸の明朝の観音像などを愛好し、ロダンの如きは殆ど顧みなかつた」。

そういう父を、光太郎は小学校から予備校にかけての、幼年時代、少年時代には絶対に崇拝していた。父以上の人

は考えられなかった。その一言一句はすべて金科玉条であった。しかし、光太郎の回想によると、父は子どもの教育ということについては特別の注意をはらっていなかった。ひとにもよく「わたしは放任主義ですよ」と言っていたが、子どものことはほとんど母まかせで、自分は学校の仕事にかかり切りであった。父と遊んだり話したりした記憶は、光太郎にはなかった。仕事場で仕事をしている父にあまりからむと、うるさがられた。光太郎は長男なので、父の家業を嗣いで彫刻家になるのは既定のことであったが、とくに父の指導をうけるということもなかった。多くの内弟子などのあいだにうろうろして、見よう見まねで何となく彫刻に親しんだにすぎない。

しかし、美術学校の生徒になると、光太郎は急に生長し、なまいきになり、吸取紙のようにあらゆる知識を吸収しはじめ、さかんに議論をしたり、本を読んだり、サンドー式体操でからだを鍛えたりした。研究科にいたころ、モークレールの本でロダンを知り、これに打ちこみ、学校での彫刻勉強に疑を持ちはじめ、彫刻科の諸先生にあきたらず、黒田清輝など新知識のいる西洋画科に再入学した。

にも拘らず、なぜ詩を書くか

その間にも木彫もやり、塑造もやり、彫塑会などという新団体に加わって作品を出し、いくらか世間の注目をひいた。ことに美校教授の岩村透が光太郎の彫刻に目をつけ、光雲にすすめてアメリカにやることにさせた。そこで光太郎は、一九〇六年、かぞえどし二十四歳のとき、アゼニヤン号という小さな船でアメリカに渡り、やがてニューヨークの彫刻家ガトソン・ボーグラム氏の通勤助手となった。

このアメリカ生活で光太郎の得たものは何であったか。『父との関係』によると、「結局日本的倫理観の解放といふことであつたらう。祖父と父と母とに囲まれた旧江戸的倫理の延長の空気の中で育つた私は、アメリカで毎日人間行動の基本的相違に驚かされた。あのつつましい謙遜の徳とか、金銭に対する潔癖感とかいふものがまるで問題にならないほど無視されてゐる若々しい人間の気概にまづ気づいた。自分の作品を人に見せる時"How do you think"とはいはないで、"How do you like"といきなり言ふ。こちらが謙遜して自分は未熟だといへば、言葉通り未熟だと思ふ。人が金をくれるのは恩恵でなくて、当然の場合だからである。私は又肉体的にも旧習から解放され、みそ汁が欲しいの、たくあんで茶漬が食ひたいのと言ひ暮してゐる銀行の派遣員などが気の毒に見えた。私はその国々のものを何でも食べて十分満足した。まださういふものの妙味が身にしみないうちに日本を出てしまつたからであらう。それは若さの柔軟性である。私は社会的に弱小な一ジャップとして、一方アメリカ人の、偽善とまでは言へないだらうが、妙に宗教くさい、善意的強圧力に反撥を感じながら、一方アメリカ人のあけつ放しの人間性に魅惑された」。

しかし、アメリカの一年半は、けっきょくのところ、光太郎から荒っぽく日本的着衣をひきはがしたにすぎず、積極的な「西洋」を感じさせるまでにはいたらなかった。その「西洋」を濃厚に光太郎がその身に浴びざるを得なかったのは、アメリカ生活につづくロンドンでの一年間の生活であった。光太郎は「ロンドンの一年間で真のアングロサクソンの魂に触れたやうに思つた。実に厚みのある、頼りになる、悠々とした、物に驚かず、あわてない人間生活のよさを眼のあたり見た。そしていかにも『西洋』であるものを感じとつた。これはアメリカに居た時にはまるで感じなかつた一つの深い文化の特質であつた」。光太郎は「それに馴れ、そしてよいと思つた」。

このようにして「西洋」であるものを感じとり、それに馴れ、そしてそれをよいと思った光太郎が、ただの仏師屋

で甘んずるはずはなかった。ロンドンから「自分の彫刻を育てるため」にパリに移り、「そのうちパリに居ることに疑問を持ちはじめ」て日本に帰って来た光太郎は、喜んでかれの帰国を出迎えた父・光雲から銅像会社を設立するようにすすめられて、ガンと頭をなぐられたような気がした。

『父との関係』には、「父と私との食ひちがひが、そろそろここらあたりからあらはれてきたのである」と説明されているが、「父と子との食ひちがひ」は、世俗的観念にしたがえば、「親不孝」ということになるかもしれない。この「親不孝」を題目にした詩が、戦後に書かれた『暗愚小伝』の中に出ている。

狭くるしい檻のやうに神戸が見えた。
フジヤマは美しかつたが小さかつた。
むやみに喜ぶ父と母とを前にして
私は心であやまつた。
あれほど親思ひといはれた奴の頭の中に
今何があるかをごぞんじない。
私が親不孝になることは
人間の名に於て已むを得ない。
私は一個の人間として生きようとする。
一切が人間をゆるさぬこの国では、

それは反逆に外ならない。
父や母のたのしく待つた家庭の夢は
いちばんさきに破れるだらう。
どんなことになつてゆくか、
自分にもわからない。
良風美俗にはづれるだけは確である。
――あんな顔してねてるよ。――
母は私の枕もとで小さくささやく。
かういふ恩愛を私はこれからどうしよう。

のちに『父との関係』にも出てくる、帰国直後の感懐を詩のかたちにしただけのものであるが、詩では直截簡潔な表現を必要とするだけに、「親不孝」「反逆」などとどぎついことばになっている。しかし、ことばがどぎつければどぎついほど、仏師屋的雰囲気にこんりん際はまりたくないという光太郎のせつじつな気持が、ここにはにじみ出ている。

そういうせつじつな気持が、帰国直後に父・光雲の示唆した銅像会社設立の計画をはげしく拒絶させたのであろうが、これは他のことばでいえば、芸術の純粋性を守ろうという気持でもあったろう。この「芸術の純粋性」ということは、光太郎にとって、絶対に妥協をゆるさない大命題であった。かれ自身の告白によれば、詩をつくることすらが、

「彫刻的分子の純粋性をまもる必要から」であった。昭和十五年に書かれた『自分と詩との関係』という文章によると、さきに引用した「私は何を措いても彫刻家である。彫刻は私の血の中にある。私の彫刻がたとひ善くても悪くても、私の宿命的な彫刻家である事に変りがない」につづいて、「ところでその彫刻家が詩を書く。それにはどういふ意味があるか」と問い、「以前よく、先輩は私に詩を書くのは止せといつた。さういふ余技にとられる時間と精力とがあるなら、それだけ彫刻にいそしんで、早く彫刻の第一流になれといふ風に忠告してくれた。それにも拘らず、私は詩を書く事を止めずに居る」という事情を打ちあけたあと、「なぜかといへば、私は自分の彫刻を護るために詩を書いてゐるのだからである。自分の彫刻を純粋であらしめるため、彫刻に他の分子の夾雑して来るのを防ぐため、彫刻を文学から独立せしめるために、詩を書くのである。私には多分に彫刻の範囲を逸した表現上の欲望が内在してゐて、これを如何とも為がたい。その欲望を殺すわけにはゆかない性来を有つてゐて、そのために学生時代から随分悩まされた。若し私が此の胸中の氤氳を言葉によつて吐き出す事をしなかつたら、私の彫刻が此の表現をひきうけねばならない。勢ひ、私の彫刻は多分に文学的になり、何かを物語らなければならなくなる。これは彫刻を病ましめる事である。私は既に学生時代にさういふ彫刻をいろいろ作つた。（中略）この愚劣な彫刻の病気に気づいた私は、その頃つひに短歌を書く事によつて自分の彫刻を護らうと思ふに至つた。その延長が今日の私の詩である」と答えている。

これは、理義きわめて明白な説明で、何も言う余地はなさそうであるが、しかし、「彫刻を純粋であらしめる」というのは、どういうことなのであろうか。右の引用文につづく文章が、「それ故、私の短歌も詩も、叙景や、客観描写のものは甚だ少く、多くは直接法の主観的言志の形をとつてゐる。客観描写の欲望は彫刻の製作によって満たされ

てゐるのである。かういふわけで私の詩は自分では自分にとつての一つの安全弁であると思つてゐる。これが無ければ私の胸中の氤氳は爆発に到るに違ひないのであり、従つて、自分の彫刻がどのやうに毒されるか分らないからである」とあるところからすれば、それは客観描写に徹して、主観的に流れないかまえをいうのであるらしい。芸術理論上そういうことが成りたつのか、わたしにはわからないが、とにかく、彫刻の純粋性をまもろうとする熱意・情熱は誰しもこれを認めざるを得ないであろう。

彫刻の純粋性をまもろうとする熱意・情熱がはげしかったので、光太郎の彫刻作品はきわめてその数も少なかった。光太郎一代の彫刻作品の表をつくってみれば、

作品名	種類	制作年代	現在の状態	備考
初期習作（「青葡萄」「兎」約十点等）	木彫	明治二六―三五		
数点	塑像	明治二六―三五		
獅子吼	石膏	明治三五	現存	
五代目菊五郎像	石膏	明治三五―三六	写真のみ	
尾崎紅葉像	石膏	明治三六	生前と没後の二度制作 没後のもののみ現存	
九代目団十郎像	石膏	明治三六―三七	不明	
伊井蓉峰像	石膏	明治三六―三七	不明	
顔に手をあてる少女	石膏	明治三七―三八	写真のみ	東京美術学校卒業制作
うつぶせの裸婦	粘土	明治三八	写真のみ	
薄命児	石膏	明治三八	一部現存	彫塑同窓会展出品

岡野昇像	石膏	明治三九	不明	
光雲還暦記念像	ブロンズ	明治四四	戦災焼失石膏原型首のみ現存	
紫朝の首	石膏	明治四五	不明	
松方正義全身像	銀	明治末期—大正初期	現存	
男の首	石膏	大正二	不明	
園田孝吉胸像	ブロンズ	大正四	現存	
今井邦子像	粘土	大正五	写真のみ	
裸婦	ブロンズ	大正五年頃	数点現存	
手	ブロンズ	大正七年頃	数点現存	
腕	ブロンズ	大正中期	現存	
足	石膏	大正中期	不明	
智恵子の首	石膏着色	大正中期	不明	
ピアノを弾く手	ブロンズ	大正中期	現存	
松方巌像	ブロンズ	大正一〇年代	戦災焼失	
柘榴	木彫	大正一三	不明	
栄螺	木彫	大正一三	不明	
蟬	木彫	大正一三	数点現存	
鮒鯽	木彫	大正一三	現存	
鯰	木彫	大正一四、一五	三点現存	
青沼彦治銅像	ブロンズ	大正一四		光雲の代作
黄瀛の首	ブロンズ	大正末期	戦災焼失	
中野秀人の首	石膏	大正一五—昭和二頃	焼失	第一回大調和展出品
某婦人像	石膏	大正一五—昭和二頃	不明	
東北の人	石膏	大正一五—昭和二頃	不明	

うそ	木彫	大正一五―昭和二頃	不明	
大倉喜八郎の首	テラコッタ	大正末期―昭和初期	現存	
桃	木彫	昭和二		
住友君の首	ブロンズ	昭和三	焼失	
黒田清輝胸像	ブロンズ	昭和六	現存	
蓮根	木彫	昭和六	現存	
成瀬仁蔵胸像	ブロンズ	昭和六	現存	
白文鳥（番）	木彫	昭和一〇	現存	
光雲一周忌記念胸像	ブロンズ	昭和一〇	現存	
赤星朝暉翁胸像	石膏	昭和一〇		
河口恵海裸体坐禅像	石膏	昭和二頃		
木暮理太郎像	石膏	昭和一五頃		
河口恵海の首	石膏	昭和一八―一九頃	不明	
プラタナスの葉	木彫	昭和一九	焼失	
裸婦像	ブロンズ	昭和二八	現存	第一回大調和展出品
倉田氏胸像	粘土			十和田国立公園功労者顕彰記念碑のための制作 未完

という程度で、仮に二十五歳のときから制作をはじめたとして、年一点平均ぐらいにしかならない。むろん、全部の作品数はこれだけにとどまらないであろうが、多くは不満として自分でこわしてしまったらしい。おまけに、戦災などで消失した作品も少なくないので、現存するものはかぞえるほどしかない。したがって、光太郎は寡作の彫刻家であったと見るほかはないが、これは、芸術作品と商品とを厳重に区別するかれの構えとも関係があるかも知れない。昭和十六年十二月号の雑誌『國画』に発表された、「兎に角、芸術作品を商品だといふ観念がなくならねばいかぬ。

作家は制作に必要なだけを社会から貰ふ。それに対して作家は感謝の意味で作品を社会に提供する。商品として提供するのでなく無料で提供するのである。さういふ相互関係の中で美術家の生活が成立つのが本来の美術家の在り方である。値段をきめるのは、ほかにやり方が無いからさう定つただけである」（『美術家と生活』、全集第六巻）という談話筆記は、そういう芸術家だましいを小気味好く表白している。それは、これにつづく「極端に言へば、もう百円出せ、もう一本描くからといふ、さういふ事を改めるには極めて今がいい時期である。美術家は今こそ最低の生活をなすべきである」という文句が端的にしめしているように、ストイックともいえるきびしい生き方であるが、そういう態度はひとり彫刻稼業にかぎらず、光太郎の生活のすみずみまで貫かれていたようである。たとえば、その詩作品にしても、原稿料をたくさんくれる大雑誌に発表するのをいさぎよしとせず、名もない同人雑誌に載せ、しかも同人費に該当するカネを為替に組んで送りとどけていたという。室生犀星が書いているように、「かれはそんな事に純潔を感じ喜びをおぼえ、さっぱりしたいい気分を感じていた」（『我が愛する詩人の伝記』）のであろう。

原因に生きる

光太郎は、著書の印税や原稿の稿料を自分で受けとらなかった場合もあった。昭和二十五年六月二十四日、中央公論社の松下英磨に宛てた封書には、「今度の詩集（注、『典型』のこと）の印税につきましては、実は初版全部を宮崎氏に進呈、再版のやうな場合が若しありましたら宮崎氏と折半のつもり」とあり、昭和二十九年一月十日、山形市の真壁仁氏に宛てたはがきには、「創元社から『ヴェルハァラン詩集』を届けられました。思つたよりきれいに出来まし

た。貴下のお骨折によるものとてありがたく存じました。これらの詩を夢中になつて訳してゐた青年の頃を思ひ出します。尚印税は少いでせうが、創元社から直接貴下の方に送るやう申して置きました。貴下の関係なさる雑誌などの費用の中にくり入れて下されば本望に存じます」と書かれている。また、昭和二十二年十二月二十五日、茨城県取手町の宮崎稔氏に宛てた封書には、「『展望』正月号の稿料を予期以上にもらひましたので少々お裾分けいたします」とある。この宮崎稔氏は、高村光太郎全集におさめられた書簡二千二百九十四通のうち、宮崎稔宛が三百六十五通（一通は稔・春子宛）を占めるほど親交があり、病床の智恵子夫人をさいごまで看取った智恵子夫人の姪・長沼春子の夫となったひとであるが、昭和二十年十一月三日付の長沼春子宛封書の「あなたの結婚についてかねてからいろいろ考へてゐましたが、此頃、小生の友人の宮崎稔君といふ人と一度会見して、事によつたら結婚されたら如何かと思ひつきましたので此事を申上げます。宮崎君は茨城県取手町の旧家の人で今独身で四十歳余、子供さんはありません。小生の事をひどく心配していつも親切に世話してくれます。花巻へも来てくれ、又山の中までたづねてくれる事度々です。いい方と信じてゐます」という文面にそのひととなりが語られている。この封書によって、稔・春子のふたりを結びつけようとしたのは光太郎であったことが知られるが、昭和二十年十一月二十五日付の宮崎稔宛はがきの「おたよりで春子さんとの話がまとまつた事を知り御両人の為によろこびました」はいよいよ結婚にふみきったことを伝え、越えて昭和二十一年一月十日、宮崎稔・春子宛封書の「此間は御両人からのおてがミをいただいて大に安心しました。どうか仲よくやつて下さい。春子さんもこれから本当の人生の味が分かるわけで生れて来た甲斐があるといふものです。宮崎さんも此の新婦を然るべく教育して本当の人間にして下さい。明るくて愉快で何かにこだはらない女性こそ望ましいものです」は結婚の成就を、昭和二十一年十二月二十六日の宮崎春子宛封書の「春子さんいよいよ本当の由、

大いに喜んでゐます。どうぞ順調にいつてくれるやうにと祈つてゐます。実に天の恵みを感じます。（中略）小生はまるで自分の孫が出来るやうな感じがしてゐます」は子供の生まれることを、そして昭和二十二年五月十日、宮崎稔宛はがきの「めでたく男子出生ときいて大によろこび、御申越により名前をいろいろ考へてゐたところ（中略）すでに光太郎と御命名ずみの由、やうやく肩の荷がおりました」は子供が高村光太郎にあやかって光太郎と命名せられたことを、それぞれに伝えているが、越えて昭和二十八年五月六日の宮沢清六宛はがきには、「宮崎稔君の死はやむを得なかつたこととあきらめる外ありません。あの酒びたりでは胃潰瘍は当然でした」と宮崎稔の死去を悼んでいる。また、昭和二十八年六月八日の宮崎春子宛のはがきで、「おてがみ見ました。配偶者に死なれるほど不幸なことはないと思ふので、大に同情しますが、今日の世の中では、戦争未亡人などが子供をかかへて勇敢に生活と闘つてゐる実状ですから、気を落さないで賢明に進んで下さい」と春子夫人をはげましているが、この後ながく光太郎は春子未亡人を経済的に援助しつづけたようで、書簡の上だけからでも、昭和二十八年の八月二十六日、十一月十二日、十二月七日、昭和二十九年の一月二十日、三月五日、五月七日、六月三日、七月二日、八月二日、八月二十七日、九月九日、十月四日、十一月一日、十二月一日、十二月十五日、昭和三十年の一月四日、二月一日、三月三十一日、四月二十九日、五月三十一日、七月四日、七月三十一日、九月一日、九月三十日、十月三十一日、十一月三十日、十二月二十二日、昭和三十一年の一月三十一日、三月一日などの日付の送金が知られる。これは、春子未亡人が狂気の智恵子夫人を献身的に看取ったことにたいする感謝の念にもとづいていようが、また、無償の行為を純粋と感ずる光太郎の心意気をもしめしているであろう。大正八年八月に発表された『岩石のやうな性格』と題する短文には、「どういふ人間が一番これから欲しいといふのです」という問いを設けて、「一番要求されてゐるのは、よろこんで縁の下の力持ちにな

れる人間です」と答えている。しかも、光太郎によると、それも「隠忍ではいけ」ないのであって、「当然の事として、ほがらかな心を以て、此役目を尽す人間です。石のやうにがつしりして、そして微妙で、小うるさい言い訳無しに静かに黙つて、常に自然と根を通じ、常に人間以上のものと交渉してゐる人間です。至極平凡なやうな英雄です」(全集第六巻)と説明せられている。光太郎には、この「よろこんで縁の下の力持ちになれる人間」でありたいという気持が強かった。その気持が、「美術家は今こそ最低の生活をなすべきである」と発言せしめたり、原稿料のない雑誌に作品を発表せしめたりしたようにわたしには思われる。彫刻作品の数がきわめて少ないのも、これでもうけてはいけないという気持があったゆえとおもわれ、彫刻で食っていない事実によってかれは彫刻の純粋性をまもっているような安心をおぼえていたらしく推測される。

しかし、人間である以上、光太郎とても食っていかなくてはならない。その食糧を光太郎は何によって得ていたのであろうか。彫刻のしごとが、むろん、一半の役目を果たしていたにちがいないが、そのほかに、詩もかれの生活をたすけていたことは疑いない。ことに戦争中は、卑俗な言いかたをすれば、光太郎の詩は大いに売れた。その詩のおかげで中央協力会議議員や日本文学報国会詩部会長に推されたり、戦後、芸術院会員に選ばれたりした(ただし、これは辞退した)。そうすると、詩の部門においては光太郎は芸術品をめざしていなかったことになるのであろうか。

むろん、そうではあるまい。わたしはここで、何とはなしに、光太郎作のつぎの二つの詩を思いだす。一つは昭和四年十一月六日作で翌五年一月号の雑誌『南方詩人』に発表された。

認識を人に求めるのは弱い。

此世に君の世界が花さくか花さかないか、深夜の絶望なんか霊獣貘に献上しませう。
人生の甘美（サウウル）自体は断じて亡びぬ。
一個の白い立方（キユウブ）体を人が砂糖と称するなら、砂糖よ、烈々たる砂糖であれ。
思想の旱りに感情飢餓の禿鷹は飛ばう。
倒れた馬にさへ嘗めさせるものを
自然は此世に忘れやしない。
ちよこまかとして戦ひ獲るのが如何に君の周囲の流行でも、
私はもう一度古風に繰返さう。
——正しい原因に生きる事、
それのみが深い。——

という『或る親しき友の親しき言葉に答ふ』と題する詩。もう一つは、大正十五年十二月五日作で、昭和二年一月号の雑誌『生活者』に発表された、

火星が出てゐる。

要するにどうすればいいか、といふ問は、折角たどつた思索の道を初にかへす。

要するにどうでもいいのか。
否、否、無限大に否。
待つがいい、さうして第一の力を以て、
そんな問に急ぐお前の弱さを滅ぼすがいい。
予約された結果を思ふのは卑しい。
正しい原因に生きる事、
それのみが浄い。

という『火星が出てゐる』と題する詩。この二つの詩には文字どおりの光太郎の志が打ちだされているように思われる。その「志」というのは、むろん、彫刻制作の場合にも適用された。その点は、「生命の戦慄が無いものは、如何なる時にもいけない。此だけは動かせない」という一段にはじまる『雑記帳より』（昭和二年一月発表、全集第五巻）と題した文章が、「私は思ふ。現代の如何なる人の言をも容易くは受け入れまい。自己の求める所と契合しない以上は吟味しよう。自己と天然とのつながりの外に何ら頼む可きものは無い。自己の幼稚さ、単純さを恥ぢまい。常に自己の本性を極めようとしよう。常に天然から発見しよう。常に古しへに就て研かう。納得の出来るだけを一歩づつ進まう。自分と彫刻と自己との間に寸隙をも許すまい。善からうと悪からうと、其は後の事である。後では考へよう。初に他の同感を予期する者は弱い、若しくは卑しい。ただ原因に生きよう。結果は与り知らない。この身を棄てよう。勝手にさせよう。あの名状し難い戦慄の導くままにどうともなれ」とむすばれていることによって明らかであるが、

この「ただ原因に生きよう。結果は与り知らない」とか、「あの名状し難い戦慄の導くままにどうともなれ」とかいう「志」は、詩の制作においてもひたすらめざされたにちがいない。それでこそ『或る親しき友の親しき言葉に答ふ』や『火星が出てゐる』などの詩もつくられたと思われるが、もし「原因に生きる」ことのみが浄く深く、「結果を思ふ」のは卑しく弱いとすれば、この世におけるいわゆる「幸・不幸」の問題はどういうことになろうか。つぎにこの問題をしばらく考えてみよう。

生来の離群性

光太郎は『へんな貧』(昭和十四年十二月三日作、昭和十五年一月号『文芸』)と題する詩で、

この男の貧はへんな貧だ。
有る時は第一等の料理をくらひ、
無い時は菜つ葉に芋粥。
取れる腕はありながらさつぱり取れず、
勉強すればするほど仕事はのび、
人はあきれて構ひつけない。
物を欲しいとは思はないが

物の方でも来るのをいやがる。
中ほどといふうまいたづきを
生れつきの業がさせない。
妻なく子なきがらんどうの家に
つもるのは塵と埃と木片ばかり。
袖は破れ下駄は割れ
ひとり水をのんで寒風に立つ。
それでも自分を貧とは思へず、
第一等と最下等とをちやんぽんに
念珠のやうに離さない。
何だかゆたかな有りがたいものが
そこら中に待つてゐるやうで
この世の深さと美しさとを
身に余る思でむさぼり見る。
この世に幸も不幸もなく、
ただ前方へ進むのみだ。
天があり地面があり、

さうして太陽は毎朝出る。
この男のへんな貧を
この男も不思議に思ふ。

とうたっているが、「ただ前方へ進むのみ」の者、すなわち「原因に生きる」者には、「幸も不幸もない」のかも知れない。いな、そういう問題がはいりこむ隙はないのだとも考えられる。「幸」も「不幸」も、みな「結果」でしかない。「予約された結果」でしかない。そういう「予約された結果」を思うのは、光太郎には「卑しい」ことであった。

さて、予約された結果を思わないということは、「初に他の同感を予期しない」ことでもあったが、ただし、光太郎の場合には、その「他」のなかに智恵子夫人ははいっていなかった。智恵子夫人の半生をしのんだ文章の中で光太郎は、「自分の作つたものを熱愛の眼を以て見てくれる一人の人があるといふ意識ほど、美術家にとつて力となるものはない。製作の結果は或は万人の為のものともなることがあらう。けれども製作するものの心はその一人の人に見てもらひたいだけで既に一ぱいなのが常である。私はさういふ人を妻の智恵子に持つてゐた」と語り、智恵子夫人ひとりだけの同感を予期して製作にあたったことを打ちあけている。智恵子夫人の生前、光太郎は「自分の製作した彫刻を何人より先に彼女に見せた。一日の製作の終りにも其を彼女と一緒に検討する事が此上もない喜であつた。又彼女はそれを全幅的に受け入れ、理解し、熱愛した」。光太郎のつくった木彫小品を「彼女は懐に入れて街を歩いてまで愛撫した」。

光太郎にとって智恵子夫人は、そのように「自分の作つたものを熱愛の眼を以て見てくれる一人の人」であったが、

『人類の泉』（大正二年三月十五日作、同年六月号『詩歌』）と題する詩では、

……

あなたは本当に私の半身です
あなたが一番たしかに私の信を握り
あなたこそ私の肉身の痛裂を奥底から分つのです
私にはあなたがある
あなたがある
私はかなり惨酷に人間の孤独を味つて来たのです
おそろしい自棄の境にまで飛び込んだのをあなたは知つて居ます。
私の生(いのち)を根から見てくれるのは
私を全部に解してくれるのは
ただあなたです

……

私にあなたが無いとしたら——
ああ　それは想像も出来ません
想像するのも愚かです

私にはあなたがある
あなたがある
そしてあなたの内には大きな愛の世界があります
私は人から離れて孤独になりながら
あなたを通じて再び人類の生きた気息(きそく)に接します
ヒュウマニテイの中に活躍します
すべてから脱却して
ただあなたに向ふのです
深いとほい人類の泉に肌をひたすのです
あなたは私の為めに生れたのだ
私にはあなたがある
あなたがある　あなたがある

とうたい、また、『僕等』（大正二年十二月九日作、大正三年一月号『我等』）と題する詩では、

……
僕は自分の痛さがあなたの痛さである事を感じる

僕は自分のこころよさがあなたのこころよさである事を感じる
自分を恃(たの)むやうにあなたをたのむ
自分が伸びてゆくのはあなたが育つてゆく事だと思つてゐる
僕はいくら早足に歩いてもあなたを置き去りにする事はないと信じ　安心してゐる
……
僕にとつてあなたは新奇の無尽蔵だ
凡ての枝葉を取り去つた現実のかたまりだ
あなたのせつぶんは僕にうるほひを与へ
あなたの抱擁は僕に極甚(ごくじん)の滋味を与へる
あなたの冷たい手足
あなたの重たく　まろいからだ
あなたの燐光のやうな皮膚
その四肢胴体をつらぬく生きものの力
此等はみな僕の最良のいのちの糧(かて)となるものだ
……

とうたっている。これらの二つの詩によって、光太郎・智恵子の夫婦(ふたり)が一心同体であったこと、二つにして一つなる

いのちであったことをわれわれはまなびうるが、また、もともと光太郎が孤独であったこと、「かなり惨酷に人間の孤独を味つて来た」ことをも知りうるであろう。ここに「もともと」というのは、さしあたって、智恵子夫人と知り合うまでの時期を指すが、しかし、光太郎はいずれの時期を問わず、なんらかの意味で孤独であったと考えられる。光太郎は、そのことを、「生来の離群性」ということばで表現している。たとえば、「一人の女性の愛に清められて／私はやつと自己を得た。／言はうやうなき窮乏をつづけながら／私はもう一度美の世界にとびこんだ。／生来の離群性は／私を個の鍛冶に専念せしめて、／世上の葛藤にうとからしめた」（『美に生きる』、〝暗愚小伝〟中）というように。

撃壤の民のこころ

さて、「生来の離群性」とは何を指しているのか。

今までに出た高村光太郎についての評論では最高のものと思われる伊藤信吉氏の『高村光太郎—その詩と生涯—』（昭和三十三年、新潮社刊）には、光太郎の人嫌いと孤独にふれて以下のような叙述がなされている——。

晩年の高村さんはどういうわけか人に対する態度が妙に寛大で、嫌々ながら応対しているような場合でも、それを表面にあらわすことをしなかった。偽善といってよいほど自分を抑えていた。なぜそんな態度をとったのか、私などには謎のようにおもわれる。

知人や訪問者に高村さんはこういう応対をしていたが、その一方、他人の世話になることや他人に手数をかけることを、できるだけ避けていたようである。むしろ嫌っていた。十和田湖畔に建てられた裸婦像の仕事がすんだ後

になって、病状がひどく悪化したらしいことを察知した周囲の人たちが、女中か家政婦をたのんで、身のまわりの世話をしてもらうように何度かすすめたが、高村さんは何としてもそれに応じなかったらしい。

こういうときの分りの悪さは驚くほどで、非科学的な口実をコネあげたり、理屈にもならぬ理屈をいったりしていた。なんとかして人の世話になることを避け、そばに人を置くことを避けようとした。病気の手当もはじめのころは姑息なことばかりしていて、（中略）もどかしい治療法ばかり講じていた。こういう点になるとまるで原始人だった。

この状態に草野心平氏をはじめ周囲の人たちはたまりかねたらしく、昭和三十年春のある日、（中略）今度こそはどうでもということで家政婦を雇うことをすすめ、次に看護婦に付き添ってもらうことをすすめた。このときも高村さんはあれこれいって拒みつづけた。サジを投げた形で「じゃ病院にはいるしかないでしょう」といったところ、どういうわけか「入院ならしてもいい」という。これには背負い投げをくわされたようなかっこうだったが、しかし間もなく赤坂の山王病院に入院した。

この場合の高村さんの心理を推し測ってみると、家政婦や看護婦の世話になるのはなんとなく個人的な人間関係ということになるが、それが入院ならばある程度パブリックなものだというような、そんな気持だったかもしれない。智恵子夫人が亡くなってから一人で駒込林町の家に住んでいたことや、岩手の山林にこもったときの一人暮しや、東京へ出てきてからのアトリエ生活など、できるだけ人手をかりぬという暮しの仕方は、俗にいう人嫌いとは少しちがうのではないだろうか。

その違いの向う側になにがあるかを私には洞察することができないけれども、そういう別個の世界のようなもの

を、高村さんは生涯にわたって持ちつづけていたようである。年代によってその別個の世界の内容は変化したろうが、孤独というものとは少しちがった裏の方に、なにかの別個の世界があったようにおもわれる。

……

この「別個の世界」についての解説を伊藤氏からじゅうぶんに聞けないのは残念であるが、それが光太郎のいう「生来の離群性」そのものにほかならないのであろう。その「生来の離群性」が智恵子夫人との出会いによってわずかに「人類の生きた気息に接し」た消息を『人類の泉』という詩は伝えていたが、ひとたびこの「人類の生きた気息に接」する唯一のパイプがなくなった場合、光太郎の「生来の離群性」はどういう羽目におちいるのであろうか。

……

私はひとりアトリエにゐて、
裏打の無い唐紙のやうに
いつ破れるか知れない気がした。
いつでもからだのどこかにほろ穴があり、
精神のバランスに無理があつた。
私は斗酒なほ辞せずであるが、
空虚をうづめる酒はない。
妙にふらふら巷をあるき、

乞はれるままに本を編んだり、
変な方角の詩を書いたり、
アメリカ屋のトンカツを発見したり、
十銭の甘らつきようをかじつたり、
隠亡(おんぼ)と遊んだりした。

これは『おそろしい空虚』(『暗愚小伝』中)と題する詩の後半で、智恵子夫人をうしなったあとのうつろな境涯をうたったものであるが、たぶん、おびただしい光太郎の戦争詩を指しているにちがいない「変な方角の詩」も、要するに、その「おそろしい空虚」を埋めるための仕事であったように見える。

しかし、これは智恵子夫人が亡くなった直後のはなしで、それからしばらく時間がたち、戦火におわれて岩手県花巻市に疎開(昭和二十年五月)して終戦をむかえ、さらに山深くはいって岩手県稗貫郡太田村山口(現在は花巻市に編入)の山小屋に独居して農耕自炊の生活をはじめるようになってからは、「おそろしい空虚」感におちいる度は少なくなったようにおもわれる。その証拠に、山小屋に独居するようになってからの感懐をうたった『山林』(『暗愚小伝』中)と題する詩の前半は、

私はいま山林にゐる。
生来の離群性はなほりさうにないが、

生活は卻て解放された。
村部社会に根をおろして
世界と村落とをやがて結びつける気だ。
強烈な土の魅力は私を捉へ、
撃壌の民のこころを今は知つた。
美は天然にみちみちて
人を養ひ人をすくふ。
こんなに心平らかな日のあることを
私はかつて思はなかつた。

というふうに綴られている。「近く太田村といふ山間の地に丸太小屋を建てて移る筈です。そこで食糧自給の生活をしながらいよいよ仕事にかかります。その地はほんとの山の中で茸の名産地、うしろに山を背ひ、前に山清水あり、畑一反余、山林に焚木をひろひ、山菜を満喫し、山羊鶏を飼ひ、兎を狩り、狐狸を友として、日本最高の文化を作り出す気です」(昭和二十年九月一日、西田大三宛はがき)という文面から判断しても、「おそろしい空虚」感などの近づきうる余地はなさそうである。

わたしは、実は、右のはがきの文面などから、光太郎の隠棲した太田村山口の山荘は人跡まれな山の中にひっそり建っているものと空想していた。「寒気つよし。朝、摂氏〇下五度。朝日出づ。午前晴、風あり。林の音すさまじ。

朝小さき鼠走り居るを見かく。あの鼠の子供か。雑煮昨日と同じ。餅食ひつくせり。凍結つよく湯にて水仕事す。ひる前十一時頃村の子供達につれられて狩猟姿の佐藤隆房氏突然来訪、猟の途中から急に来訪せりとの事。村の子供達五人は分教場から郵便物持参、又配給の酒を届けに来りしなり。院長さんは一度道に迷ひ、偶然子供達にあつて一緒に来りしとの事。恭三さん宅に立寄つてカンジキを入手したりとてよきカンジキを携へられる。子供達にはみかん一つ宛やりてかへす。(酒は二十一円二十三銭)、払ひ渡す。つりとらず。院長さんと爐辺にて話す。皆さん御無事の由。配給の酒一合あたためて一緒にのむ。茶をいれて院長さんはお弁当。余は飯盒の残り飯をくふ。コイカ漬を出す。一時半頃院長さん辞去。今月中に花巻に出る約束。夕食飯炊(ジャガ入)、かん詰のギニナソーセージ(秋廣さんよりのもの)をあけて油でいためキャベツも一緒にいためてくふ。美味なり。ソーセージは進駐軍より配給のものといふ。オーストラリヤ製なり。夜コタツつくりて読書。養徳社より田部重治の山の本、秋桜子の句集など送り来る。花巻の精一郎さん十二日の日曜に来訪といふハガキあり、鼠の音はせず。子鼠いかにせしか。(午後三時頃普通便)夜月よし。十二日位の月也。零下二度」(昭和二十二年一月三日)という類の日記の記事からも、そう想像するほかはなかった。ところが昭和三十九年の秋、花巻の中学校で講演を頼まれた機会に山荘をたずねてみると、なるほど山ふところにはちがいないが、前はひろびろとひらけた平坦地で、山の中という感じは少しもしないのは意外であった。山荘まで行く五百メートルばかり手前に、むかしの分教場、今の山口小学校があって、これが山荘にいちばん近い建物である。郵便物はここを中継所にして山荘にとどけられていたらしく、今も山荘の鍵をあずかっているのは山口小学校の校長さんである。わたしは、花巻市の教育委員会のひとたちといっしょに校長さんの案内をうけて山荘の内外を見てまわったが、人が住めないような陰惨な環境ではないのにホッとした。山荘は七坪半の粗末な小屋にすぎないが、今は昭

和三十二年十一月に竣工した套屋によって保護されており、内部の調度品もむかしのままであるらしい。山荘の横手に、

雪白く積め り。
雪林間の路をうづめて平らかなり。
ふめば膝を没して更にふかく
その雪うすら日をあびて燐光を発す。
燐火あをくひかりて不知火に似たり。
路を横ぎりて兎の足あと点々とつづき
松林の奥ほのかにけぶる。
十歩にして息をやすめ
二十歩にして雪中に坐す。
風なきに雪蕭々と鳴つて梢を渡り
万境人をして詩を吐かしむ。
早池峯(はやちね)はすでに雲際に結晶すれども
わが詩の稜角いまだならざるを奈何にせん。
わづかに杉の枯葉をひろひて

今夕の炉辺に一椀の雑炊を煖めんとす。
敗れたるもの卻て心平らかにして
燐光の如きもの霊魂にきらめきて美しきなり。
美しくしてつひにとらへ難きなり。

という『雪白く積めり』の詩を銅板に彫った碑が立ち、背後の岡をのぼれば「智恵子展望台」と称する見晴らしの好い場所に出る。近いうちに遺作や遺品を収蔵した記念館も建つことになっていたが、願わくば、右の『雪白く積めり』という詩のように清楚で、気品のあるものにとどめ、厳に俗化をふせいでいただきたいと思った。光太郎をめぐる伝説には、そういう俗化に導かれやすい要素が多いと思われるが、光太郎そのひとは天然にみちみちている美にとりまかれた粗末な山小屋に住んで撃壌の民のこころを味わい得る魂をもっていた。昭和二十七年八月三日作、同年九月号の雑誌『婦人之友』に発表された『山の友だち』という詩を読んでみよう——。

山に友だちがいっぱいいる。
友だちは季節の流れに身をまかせて
やって来たり別れたり。
カッコーも、ホトトギスも、ツツドリも、
もう〝さようなら〟をしてしまった。

古川哲史

セミはまだいる、
トンボはこれから。
変らないのはウグイス、キツツキ、
トンビ、ハヤブサ、ハシブトガラス。
兎と狐の常連のほか、
このごろではマムシの家族。
マムシはいい匂をさせながら
小屋のまわりにわんさといて、
わたしが踏んでも怒らない。
栗がそろそろよくなると、
ドングリひろいの熊さんが
うしろの山から下りてくる。
恥かしがりやの月の輪は
ついにわたしを訪問しない。
角の小さいカモシカは
かわいそうにも毛皮となって
わたしの背中に冬はのる。

この童謡ふうの可憐な詩を読んでいると、山小屋での詩人のあけくれがいかにも怡しげで、羨しくもおもえてくる。「おそろしい空虚」感などとは、およそ縁がなさそうに見えるのである。

淋しさ知らぬ孤独

しかし、

彫刻家山に飢ゑる。
くらふもの山に余りあれど、
山に人体の饗宴なく、
山に女体の美味が無い。

――『人体飢餓』（昭和二十三年四月十日作、同年七月号雑誌『心』）

というように、山には「人体の饗宴なく」、「女体の美味が無」かった。そこで、おのずから、「渇望は胸を衝く」。詩人は「氷を嚙んで暗夜の空に訴へる」のである。「雪女出ろ。この彫刻家をとつて食へ。とつて食ふ時この雪原で舞をまへ」と。

が、「雪女はつひに出ない。雪はふぶいて小屋をゆすり、雪片はほしいままに頰をうつ。彫刻家は炉辺に孤坐して

大火(おほび)を焚き、わづかに人体飢餓の強迫を心に堪へる」のである。

ところで、雪女の代わりに智恵子夫人は雪原に出現しなかったであろうか。『報告』(昭和二十七年十一月二十二日作、昭和二十八年一月号雑誌『いづみ』)と題する詩の終りに、

あなたのきらひな東京が
わたくしもきらひになりました。
仕事が出来たらすぐ山へ帰りませう、
あの清潔なモラルの天地で
も一度新鮮無比なあなたに会ひませう。

とあるところから察すると、光太郎は死んだ智恵子夫人とも会っていたらしい。前に紹介した智恵子夫人の姪の宮崎春子は、智恵子夫人の亡くなったあとしばらく伯父・光太郎の世話をしていた折りのこととして次のようなエピソードを語っている。

それは、智恵子夫人の亡くなった年の十一月も中旬をすぎ、寒さも一段と加わってきたころのことであった。春子は白金三光町の家まで冬の衣類をとりに初めて外出し、その夜七時ごろ帰宅して玄関の鈴をならすと、ちょっとたってから光太郎がドアをあけ、

「お帰り、いま智恵子が来ているから失礼」

といって、さっさと二階に上ってしまった。春子はびっくりしてドアをしめ、階段の下まで行って暫くじっとしていたが、心配でたまらずソーッとのぼっていった。階段ののぼりきったちょっと右よりの窓べに小さなテーブルが置かれ、空のコップが二つむきあっておいてあり、光太郎はぼんやり腰かけていた。

「伯父さま――」

「あ……」

光太郎はなにをみつめているのか、夢をみているような瞳をむけて、

「今まで智恵子が来ていたんだよ、……ほら、コップが二つあるだろう……二人でビールを飲んだんだよ……そっちのが智恵子のだよ……智恵子は少しも変っていなかったね……若くって、きれいだったよ、着物をきてね、あの大島の着物、知っているだろう」

春子がただだまって合槌を打っていると、

「この子供は僕たちの子供だよ、可愛いいだろう」

大きなキューピーが壁に背をむけておすわりしていた。外は満月。月光は青白くすみずみまで照していた。その青白い月光の中の松の木を指して、光太郎は言った。

「あの松の木の頂上まで月がのぼってきたら、智恵子はいってしまったよ」

右のエピソードは、春子自身の文章によって紹介したが、むろん、フィクションではないであろう。光太郎自身も、『某月某日』と題する文章の中で、「既に私は十一月の満月の夜、自宅の二階で死んだ筈の智恵子と一緒にビールをのんだ。外出してゐた看護婦さんの帰宅で此の場面は終りを告げた」ことを語っている。

梅原龍三郎も、弔辞の中で、パリの冬の霧の深いある朝、光太郎がノートルダムのセン塔にのぼったところ、空中を歩けそうであやうく飛ぶところであったというエピソードを紹介して、「君の生活は夢と現の間の様に思つた」と語っている。有島生馬の回想によっても、パリ時代の光太郎は、「時に姿をみせると、巴里の空を飛べさうな気がした話や、セエヌ河が真赤な血を流してゐた話や、そんな神懸り的な事を真面目でぼつりぼつり云つた」という。光太郎には、若いときから、そういう神懸り的なところが多分にあったらしいから、死んだ智恵子夫人が会いに来て、いっしょにビールを飲んだというのも、光太郎としては真実であったのであろう。『某月某日』と題するさきの文章は、「妻の智恵子が死んだ時、死ねば死にきりには違ひないが、その言葉を頭の底にたくし込んで、それでも尚且つ生き延びの感情が波のやうに全身を洗ふのを止め得なかつた。いや、現在今でもその感情の真に抵抗し得ないでゐる。昔の人が、親子は一世、夫婦は二世といつた実感が分るやうな気がする。智恵子のいのちは此家に充満する。智恵子の個体が灰になつてしまふと同時に、智恵子の存在はアトムとなつて到る処に充塡する。百千倍となつた復活である。此が所謂二世代だ。私そのものが既に現在にして而もその二世代を生きてゐるのである。云々」というのが前半で、ついで「智恵子が生きてゐる時よりも身近」かな例として十一月の満月の夜のエピソードを紹介し、「此の事に不思議の感は更になかつた。他界との交通といふやうな霊界の有無に関する問題でなく、此は単純にもつと身近かな、一致性による主観誘導の顕現現象に過ぎないと考へる。ともかくも智恵子が死んだらぺちやんこになるかと自分を危んでゐたが、死ぬと同時に個体の独存性を失つて却つて強度の遍在性を有するに至る事を知つて意を強くした。一度は、智恵子が死んでしまつて、私の仕事をほんとに、しんみに見てくれる人が此の世の中に居なくなつたと思ひ沈んで悲んだが、今思ふと、私が仕事に熱中することその事が、既に智恵子のからだに触れてゆく事なんだ。智恵子はいつで

も微笑して其処に居る」ということで終わっている。「死ぬと同時に個体の独存性を失つて却つて強度の普遍性を有するに至る」という思想は、昭和二十一年二月号の雑誌『ポラーノの広場』に発表された、「人はよく一人で淋しいだらうといふけれども、僕はちつともさういふことはありません。人が淋しいといふ場合、多くは恐怖感を伴つてゐます。僕は何も恐ろしいことはない——それにいつでもただ一人でゐるのではありません。この小屋の中にはいろいろの有象無象が充満してゐますが、これらが消え去つたあとに、昔の人たちが出て来ていろいろ囁きます。最後に智恵子が出て来ます。食事の時でも執筆の時でも、僕はいつでも智恵子と二人ゐます。人間は死ねば普遍的になります。生きてゐる間は対ひ合つてゐる時だけの二人ですが、死ねばどこへでも現れます。ここにかうしてゐても、散歩してゐる時でも、いつも智恵子は僕の傍に居ます」という談話筆記などには、なお一段と率直なかたちで表白されているが、詩でも、

智恵子はすでに元素にかへつた。
わたくしは心霊独存の理を信じない。
智恵子はしかも実存する。
智恵子はわたくしの肉に居る。
智恵子はわたくしに密着、
わたくしの細胞に燐光を燃やし、
わたくしと戯れ、

わたくしをたたき、
わたくしを老いぼれの餌食にさせない。
精神とは肉体の別の名だ。
わたくしの肉に居る智恵子は、
そのままわたくしの精神の極北。
智恵子はこよなき審判者であり、
うちに智恵子の睡る時わたくしは過ち、
耳に智恵子の声をきく時わたくしは正しい。
智恵子はただ嘻々としてとびはね、
わたくしの全存在をかけめぐる。
元素智恵子は今でもなほ
わたくしの肉に居てわたくしに笑ふ。

――『元素智恵子』（昭和二十四年十月十三日清書、昭和二十五年一月号『新女苑』）

などのほか、普遍者智恵子、元素智恵子を題材にしたものが少なくない。元素智恵子が常に光太郎の肉にいて光太郎に笑いかけるとすれば、少なくとも内面的には、光太郎の孤独はありえないわけになるが、じじつ、光太郎は『淋しさ知らぬ孤独―ある夫人への返事―』（昭和二十二年四月号『婦人朝日』）という文章に、「小生は言はば一個の風来で、

何処にゐても、そこで出来るだけの仕事をし、出来るだけの務めを果たして、そして天命来らば一人で死ねばそれで万事結着といふ孤独生活者です。父母もなく、妻も子もありません。さういふ者は他から見ると甚だ淋しいやうに見えますが、当人は多く却つて淋しさに悩まぬものです。底知れぬ深い孤独感は、群集の中にゐても親子けん属の中にゐても人間としてはまぬかれないものでこれは別です」としるしている。孤独生活者ではあっても、孤独感に悩んではいない、というのである。光太郎の詩集に余り収録されていない、

孤独の痛さに堪へ切つた人間同志の
黙つてさし出す丈夫な手と手のつながりだ
孤独の鉄しきに堪へきれない泣虫同志の
がやがや集まる烏合の勢に縁はない
孤独が何で珍らしい
寂しい信頼に千里をつなぐ人間ものの
見通しのきいた眼と眼の力
そこから来るのが尽きない何かの熱風だ

という詩、『孤独が何で珍らしい』と題する詩も、孤独の痛さに堪え、孤独の鉄しきに堪えるおとこらしさをたたえている。光太郎は孤独生活者であったかも知れないが、孤独感によって打ちのめされ、孤独感の前にたじろぐような

人間ではなかったかに見える。いな、さきに紹介した『人類の泉』と題する詩にあったように、「孤独に満足さへしようとする」おもむきであるが、これには、「極度の純粋には社会性の存在する余地がない」とするかれ独自の考えもからんでいるかも知れない。「狂気の人のいふ言葉はわれわれのよりも真理に近い。狂気の人のいふ事をきいてゐると、われわれの生活の方が悪いやうに思へて来る。極度に純粋になれば人は誰でも狂気になるにちがひない。極度の純粋には社会性の存在する余地がない。社会性の喪失する時当然その人は社会から閉め出される。それを人が狂人と呼ぶ」(『某月某日』)――こういうのが、光太郎の考えであった。この考えにしたがえば、「孤独に満足すること」は「純粋をまもること」にほかならないわけであるが、この「純粋をまもる」ことが、光太郎倫理の極北、光太郎倫理の眼目であった。とすれば、孤独こそは、光太郎にとっての救いであり、幸福であったのかも知れない。